

金子三太郎

1. 帝国炭業株式会社のこと

鈴木商店は元来砂糖と樟腦から発足した商事会社であつたから鉱山の経営などの仕事は比較的後年迄着手されなかつたそれには鉱山業は昔から見込み違ひの多い危険な事業で俗に山師と云われる位のものでつたから安全確実な仕事を旨とした鈴木商店では永い間見送つておつたのである。然し大正四年の才一次欧州戦争の結果我国の生産工業界が急激に大発展をなし、鈴木商店の関係会社の資源補給上からも金属鉱と石炭の開発には着手せざるを得なくなつたのである。

1. 下関支店に開設せられた石炭事業

九州炭の中心市場にある鈴木商店の関門支店に於いてはかねてからエネルギー資源として石炭の販売を行いたく考えていたが、その機会がなく見送つておつたが、やつと此方面に進出する了解を神戸本店から得ることが出来た。これが大正元年から此年頃の事である。支店長は西岡貞太郎氏、石炭の主任は石田亀一氏であつたが石炭の事情に精通してゐる者がないので他店の石炭販売に慣れたものを二三人雇入れてまづ細々と買入れ販賣から手をつけて、次に個人経営の採掘業者の石炭を前貸金を渡し一手取扱の契約をした。それから次に筑豊の中心飯塚付近にある神ノ浦炭鉱（未着手鉱区）を買収し自家採掘経営を始めた。此鉱山が石炭開発才一号であつた。其の技術者は八幡製鉄の瀬野鉱業所長だつた大滝氏が入社した。此鉱山は幸にも比較的順調に発展したので、将来の石炭経営希望を持つことが出来た。

この様に石炭について経験と自信が出来つゝある時に、あの歴史的な才一次
欧州大戦が勃発したのである。これは大正四年であつたが、後年世界的な好
景気となる此大戦も開戦直後は市況が一時混乱して大正四年五年と益々不況
に陥つた。然し追々戦局が拡大し軍需品や船舶の需要が拡大して注文が我国
に殺倒する様になつて来た上にこれらが数年間持続したからたまらない。

前後未曾有の好況が全国に拡がつた。鈴木石炭部もこの好調の波に乗つて
急激に拡大強化していつたが鈴木商店全体の大飛躍も此大戦の莫大なる利益
がその源泉となつてゐる。其後石炭の方は大正十二年の関東大震災には多少
の打激を受けたが、これも無事きりぬけて昭和二年鈴木商店の整理事件迄は
年毎に発展し順当なる経過を取めた。

帝国炭業株式会社最盛期の内容

- 1. 本社の所在地 下ノ関市観音崎町鈴木支店
- 2. 創立年月日 大正五年頃
- 3. 資本金 貳千万円
- 4. 経営鉱業所
 - 一 神ノ浦炭鉱 (福岡県)
 - 二 〇福岡炭鉱 〇姪ノ浜炭鉱 (福岡)
 - 三 〇木尾ノ瀬炭鉱 〇宮ノ下炭鉱
 - 四 起行小松炭鉱
 - 五 鴻ノ巣炭鉱 御徳炭鉱
 - 六 上山田炭鉱
 - 七 中里炭鉱 山代炭鉱
 - 八 〇朝鮮成興炭鉱

(上記の内〇印は松昌洋行より台湾銀行が引上げ帝
炭に合併した分)

1. 出炭月額 約貳拾万屯

1. 買収炭月額 約拾万屯

合計毎月取扱数量約參拾万屯

(注)この数量は当時若松港を中心とする石炭会社の三井、三菱に次ぐ
才三位

1. 販売先 鈴木商店關係会社全般

例えば、神戸製鋼、帝国人絹、大分人絹、帝国汽船、鈴木關係汽船、彦
島クロード、彦島亜鉛、豊年製油、鉄道省、郵船、商船、朝郵、日紡、
東洋紡、日発電、製糸会社、其他全般

1. 販売機関 帝炭本社帝炭門司若松出張所

大阪神戸出張所、鈴木商店名古屋東京京城各支店

台北香港支店

1. 輸送設備 (イ) 港内及阪神間運航曳船汽船拾五隻、若松阪神間石
炭運般用被曳船參百屯積約百隻

(ロ) 木造船造船所

巖流島 / 力所

木ノ江港 / 力所

役員 代表取締役社長 西岡貞太郎
鈴木商店支店長兼任

専務取締役 石田亀一